

国内初の子宮頸がん予防ワクチンについて

子宮頸がんは、その発生の多くがヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの感染が関連しているとされています。このウイルスは、多くの場合性交渉によって感染すると考えられています。この子宮頸がんの原因とされるHPVの感染を防ぐワクチン「サーバリックス®」が2009年12月22日からグラクソ・スミスクライン株式会社から発売されました。このワクチンは海外ではすでに100カ国以上で発売されています。

HPVには多くの種類がありますが、今回発売された子宮頸がん予防ワクチンは子宮頸がんの原因として最も多く報告されているHPV16型と18型の感染を防ぐワクチンです。このワクチンは、あくまでワクチンを接種した後のHPV感染を防ぐものです。

接種対象は10歳以上の女性で、半年間の間に3回（初回、1カ月後、6カ月後）筋肉注射します。感染を防ぐために6ヶ月間で3回のワクチン接種を行います。今のところ、ワクチンを3回きちんと接種した人では、最長で6.4年間ウイルスの感染を防ぐのに十分な量の抗体ができていることが分かっています。ワクチンの追加摂取の必要があるかどうかや、効果がいつまで続くかなどは、開発されてから日が浅いため、まだはっきりとわかっておりません。また、今回発売された子宮頸がん予防ワクチンを接種することで子宮頸がんの原因として最も多く報告されているHPV16型と18型の感染を防ぐことができますが、発がんの原因になる全てのHPVの感染を防ぐことができるわけではありません。ワクチンを接種していても子宮頸がんにかかる可能性は残ります。

このワクチン接種には保険が効かないので全額自己負担となります。詳しくは、接種される医療機関にお問い合わせください。

ワクチンについて

● ワクチンのウイルスに対する効果

ウイルスが体に入ると免疫反応により、それを攻撃する抗体が作られます。しかし、この抗体が作られるまでには少し時間がかかり、その間にウイルスが増殖してしまい抗体が十分に効果が発揮できなくなることがあります。ワクチンを接種することで、あらかじめ、抗体を作らせておき感染後はウイルスが増殖する前にいち早く攻撃する体制を整えておくことができます。

● ワクチンの種類と特徴

ワクチンは大きく分けると「生（なま）ワクチン」、「不活化（ふかつか）ワクチン」、「トキソイド」の3種類があります。

生ワクチンは病原性を弱めたウイルスや細菌等を接種して体内でウイルスや細菌が増殖し感染を起こさせるものです。そのため接種後に得られる免疫は強いものとなります。

次に違う種類のワクチンを接種する場合は27日以上間隔をあける必要があります。
主なもの：麻しん、風しん、ポリオ、BCGなど

不活化ワクチンはウイルスや細菌等を加熱やホルマリン等を用いて処理し、死滅した病原体または、その成分で作ったものです。生ワクチンのように体内で増殖することがないので、安全性は高いですが十分な免疫を得るためには数回の接種が必要となります。子宮頸がん予防ワクチンもこの分類に入ります。

次に違う種類のワクチンを接種する場合は6日以上間隔をあける必要があります。
主なもの：インフルエンザ、日本脳炎、B型肝炎など

トキソイドは病原体が増殖する過程で作られられる毒素(トキシン)を取り出し、ホルマリンで処理し毒性をなくして免疫原性だけを残したものです。不活化ワクチンの一種となります。

次に違う種類のワクチンを接種する場合は6日以上間隔をあける必要があります。
主なもの：破傷風トキソイド、ジフテリアトキソイドなど